

高等学校

平成4年度

教育研究員研究報告書

芸 術  
(美 術)

東京都教育委員会

平成4年度

教育研究員名簿（芸術－美術）

学 校 名	氏 名
東京都立日比谷高等学校	教諭 遠山 厚史
東京都立大泉学園高等学校	教諭 松村 世津子
東京都立墨田川高等学校	教諭 妹尾 宏行
東京都立久留米西高等学校	教諭 杉本 昌裕
東京都立調布北高等学校	教諭 小林 操

担当 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 永関 和雄

研 究 主 題

多様な生徒の表現能力を高める指導の工夫

目 次

I 主題設定の理由 .....	1
II 研究の方法 .....	1
III 研究の内容 .....	3
IV 実践事例	
1. コンピュータ等の機器を利用した絵本制作 東京都立久留米西高等学校 杉本 昌裕 .....	4
2. 人形をつくる 東京都立墨田川高等学校 妹尾 宏行 .....	8
3. CDカバーのデザイン 東京都立大泉学園高等学校 松村世津子 .....	12
4. 視覚障害児も遊べる玩具の制作 東京都立調布北高等学校 小林 操 .....	16
5. 生徒が自ら課題を選び、主体的に制作する授業 東京都立日比谷高等学校 遠山 厚史 .....	20
V 考察と今後の課題 .....	24

# 多様な生徒の表現能力を高める指導の工夫

## I 主題設定の理由

急激な社会の変化に対応して、高校生の価値観や興味・関心はますます多種・多様になってきている。しかし、「多様化」は「個性化（自分らしさ）」につながるとは必ずしも言えない。かえって現在の生徒は、自己を表現する時に、画一的・均一的になってしまったり、自己意識のもてないバラバラな表現に終わってしまう傾向も見られる。

このような現状において、高等学校教育では、生徒の多様性を認めるだけでなく、自己理解と他者理解を基に自己表現できる個性豊かな生徒を育てる必要がある。そのためには、まず自己を認識する力を培い、さらに自分らしく表現する能力を高める学習が重要である。

美術の学習においては、これまで、題材の工夫、手作業の重視、材料・用具・技法の活用などによって表現能力を高める指導の工夫を進めてきた。しかし、生徒一人一人が自分らしい表現を確認し、高めるためには、多様な生徒に対応できる指導の工夫が必要であると考え。

そこで、本研究では、美術の学習における多様な生徒の実態を把握し、類型化し、その類型に基づいて、高められる表現能力を明確にすることとした。

特に、表現能力の段階的な育成の目安を作り、視覚的・触覚的に表現ができる美術の特性を活用しながら、それぞれの題材における指導の工夫を考えた。そして、このような美術の学習活動全体を通して、自己理解・他者理解を基に自分らしく表現できる能力を体得させることが、個性豊かな生徒を育てることの一助になると考え、本研究主題を設定した。

## II 研究の方法

### 1. 研究の視点

本研究に当たって、次の二つの課題を明確にし、研究の視点とした。

- (1) 多様な生徒の美術学習における実態をどのように把握し、分析するか。
- (2) 美術の学習によって高められる「表現能力」とは何か。

5人の研究員の所属校がある地域や学校によっての生徒の興味・関心、意欲、能力などは異なるため、研究の視点を共通に理解し、本研究の出発点にして各実践研究を展開していくこととした。

## 2. 美術の学習における多様な生徒の実態の類型化

学校ごとに違った指導をしているため、多様な生徒の実態の類型化を行うことは大変難しい。生徒の数だけ類型があるとも言えるし、一人の生徒にその類型が全部当てはまる場合もあるとも言える。

しかし、ここでは教師の分析を中心に、生徒のもつ目立った傾向を類型化し、とらえようと試みた。学校により多少の違いはあるが、研究員所属校5校の生徒については、以下のように整理することができた。

【多様な生徒の実態の類型表】

類 型	技 術	構 想 力	意 欲	特 徴
A 没 入 型	○	○	○	創造力が豊かで、描写力・構成力にも優れている。主体的に制作に取り組める。
B 無 難 型	○	○	△	ある程度のレベルで満足してしまい、深く追求しない。話や説明は理解している。
C 義 務 型	△	△	×	義務的に作業を進めるため意欲に欠ける。人のまねの表現に終わりがちである。
D 不 器 用 型	×	○	○	意欲があり、発想力もあるが、描写力・構成力に欠ける。追求心はある。
E 真 面 目 一 方 型	△	△	○	意欲的だが、柔軟に制作に取り組む態度に欠ける。自分らしい表現ができにくい。
F 集 中 力 不 足 型	△	△	△	興味・関心はあるのだが、じっくりと作品を完成させる態度や計画性に欠ける。
G 無 気 力 型	△	×	×	制作に対する意欲に欠けがちである。美術の表現活動を楽しむことができにくい。

注(1) ○…ある, △…多少ある, 未発達部分がある, ×…あまりない

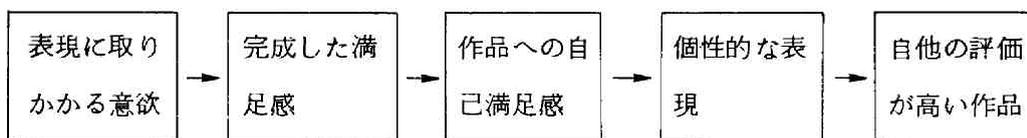
注(2) 意欲には, 興味・関心, 追求力を含める。

これらの分析の結果、現状では、Bの「無難型」、Cの「義務型」が多いように推測される。また、Dの「不器用型」やEの「真面目一方型」に対して、適切な指導をすることが、芸術を愛好する態度を育てる美術教育の大切な役割であると認識した。

### 3. 美術によって高められる表現能力

自己が形成される高校生の時期に、美術教師は、美術の授業を通して生徒のどのような表現能力を高めるべきであろうか。この素朴な命題が、研究の出発点となったが、多様な生徒の実態を考慮すると、やはり生徒の数だけ高めたい表現能力があるように思える。しかし、ここでは、特に「自分らしさを表現しようとする態度や能力」を高めたいと考えた。

さらに、初めから目標を高く設定することは困難であることから、表現能力を段階的に高めていくための目安を以下のようにまとめた。



## Ⅲ 研究の内容

Ⅱで述べた研究の視点から、以下のような多様な生徒に対する類型別の表現能力を明確にした。

- |   |        |                    |
|---|--------|--------------------|
| A | 没入型    | ・・・自他ともに評価できる表現能力  |
| B | 無難型    | ・・・意欲をもち、個性的に表現する力 |
| C | 義務型    | ・・・表現を楽しみ追求する能力    |
| D | 不器用型   | ・・・幅広い表現技術         |
| E | 真面目一方型 | ・・・柔軟な発想力          |
| F | 集中力不足型 | ・・・持続力             |
| G | 無気力型   | ・・・制作を楽しむことと基礎的な技術 |

各研究員の所属校の実態を基に、この類型の中からいくつかを選択し、各自の題材を通して、多様な生徒の表現能力がそれぞれに高まる指導の工夫を考え、研究授業の分析・考察を行い、検証することとした。

## Ⅳ 実践事例

### コンピュータ等の機器を利用した絵本制作（K校）

#### 1. 題材設定の理由

最近の高校生の作品内容の傾向として、テレビ、雑誌、マンガなどの影響を色濃く受けたものが多い。そのためか、自己の内面表現よりも軽快であっさりとした表現が多くなり、作品へのこだわりも薄くなってきたように思う。このような現状においては、一人一人が自分の好みに合わせ、気楽に表現活動に取り組める面も生まれてきたが、完成した作品は画一的になったり、発想や構想を自分らしい表現にまで十分に高められなかったりする傾向がみられる。

それは、多様な発想を表現する方法、表現のための材料・用具の活用法などが、生徒にしっかり身に付いていないことに起因するようである。現在の生徒は、コンピュータ、TVゲーム、ビデオ等、機器に対して興味・関心をもち、それを使いこなす力を持っている。そこで、これらの機器を美術の学習の中で利用したら、多様な生徒に対応した材料・用具として、今までとは違った表現方法を模索できるのではないかと考えた。さらに、自由な雰囲気によって、自分らしい作品を作ることができると考えた。

デザイン的な課題である「創作絵本」の制作にあたり、このように、コンピュータ等の機器を利用することで、材料・用具・技法の活用の幅を広げ、多様な生徒一人一人が、自分らしい表現をする態度や能力を体得できると考え、これを題材設定の理由とした。

#### 2. 指導目標（特に、機器を利用することによって）

- (1) 興味・関心を高め、意欲を持続させる。
- (2) 材料・用具・技法の活用の幅を広げ、作業や表現を楽しみながら工夫させる。
- (3) それぞれが、自分の構想に合わせ、自分らしい表現を工夫できる態度を育てる。

#### 3. 多様な生徒に対応した指導の工夫

K校における美術学習における生徒の実態は、類型別表に当てはめてみると、「B（無難型）」「C（義務型）」「F（集中力不足型）」が多いようである。他には、用具・材料などの準備ができにくかったり、友達同士が同じような作品を作ったりする点などの実態が見られ

る。そこで、本題材では、特にこの三つのタイプに焦点を当て、機器を利用することによって、それぞれ次のような高めたい表現能力を明確にし、具体的な指導の工夫を考えた。

- (1) 「B（無難型）」…多くの機器・材料を利用することで生まれる思いがけない表現効果や、機器の様々な機能などを利用することで、つぎの表現へのヒントを発見させ、個性的な表現を追求する気持ちを引き出し、意欲的に取り組む態度を育てる。
- (2) 「C（義務型）」…機器を使い、多様で段階的な制作過程の中に、自分が興味・関心のもてるものを見つけさせ、特にその過程には積極的に取り組ませることで、表現を楽しみながら追求する気持ちと態度を育てる。
- (3) 「F（集中力不足型）」…表現する内容を普段の生活の中の興味・関心から発想させたり、機器を使うと、「こんなことができる」という技法を提示し体験させたりすることで、まず、制作への意欲を引き出す。次に作業を短時間の段階的な工程にすることで、完成への見通しを常にもたせ、それぞれの段階で成就感が得られるような授業の工夫を図ることで持続力を育てる。

#### 4. 準備（利用できる機器類）

〔コンピュータ室〕…パーソナルコンピュータ48台、ワープロソフト（キーボード使用）・グラフィックソフト（マウス使用）各48個

〔美術室・美術準備室〕…ビデオ3台、ビデオプリンター1台、カメラ1台、デジタル・スチルカメラ1台、ビデオカメラ1台、フロッピーカメラ2台、ハンディコピー機3台、コピー機1台、文字テープライター1台

尚、K校はそれぞれの教室等が3列に並び、3教室で同時に授業を展開できる利点にも恵まれた。



機器の活用風景



## 5. 制作過程

	学 習 活 動	指 導 の 工 夫
導 入	(1) 参考作品の鑑賞 (過去の生徒作品, 参考資料本) (2) 絵本制作の概要の理解 (3) 利用する機器類の理解	機器に対する興味・関心から意欲を引き出し, 新しい用具や材料から, 表現を自由に楽しもうという気持ちを育て, さらに, そこから柔軟な発想をもって制作に取り組める動機付けを図る。
展 開 1	(1) コンピュータ練習 ①グラフィック実習 ②ワープロ実習 (2) 他に利用する機器類の理解と簡単な実習(一部生徒, 実習)	コンピュータ等の機器類を楽しみながら実習させる。そして, 機器の活用法を考えさせる。
展 開 2	(1) 製本(中とじまで) (2) コンピュータ室と美術室に別れて制作(K校は教室が隣接) (3) 製本(表紙)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・段階的な作業を行うことで目標をもった作業をさせ, 段階ごとに成就感をもたせる工夫を図る。</li> <li>・手作業とそこでの試行錯誤を通した個々の工夫から, 構成力を養わせる。</li> </ul>
ま と め	(1) 生徒作品の発表, 鑑賞 (2) 作品の部分改善	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己の作品と他の人の作品の違いから, 個性的な表現とは何かを気付かせる。</li> <li>・鑑賞後, 工夫・改善させるようにし, 更に, 追求しようとする気持ちを育てる。</li> </ul>

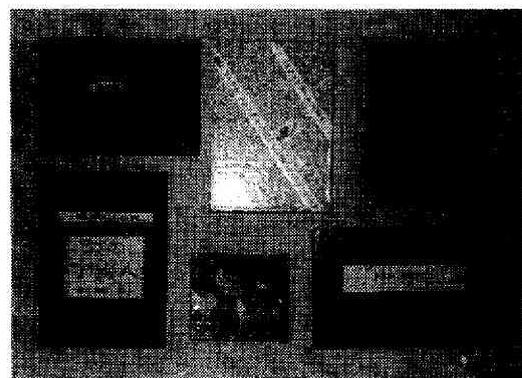
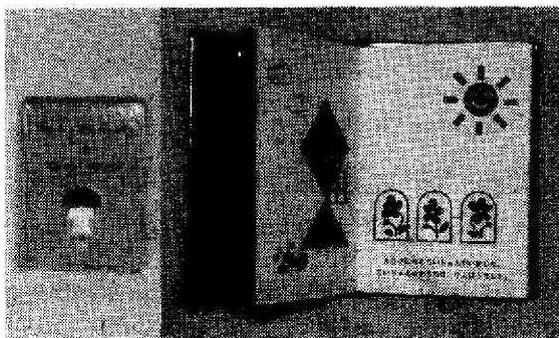
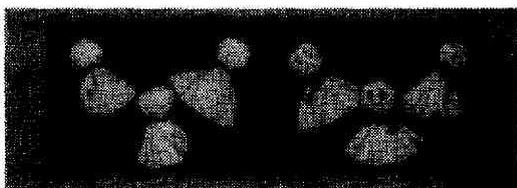
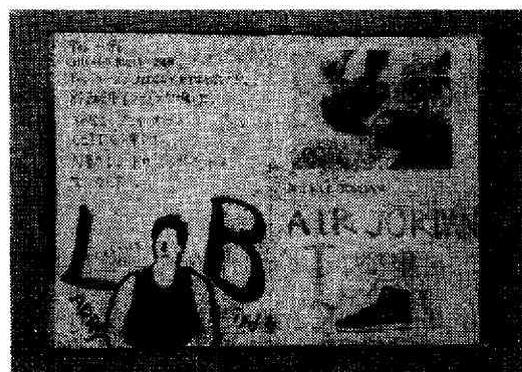
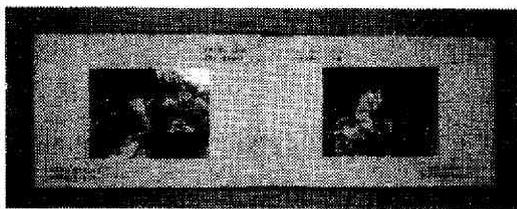
## 6. まとめと今後の課題

「絵本制作」は, こと数年実施している課題である。しかし, 今回の研究では, 1年の1学期に行ったこと(これまでは3学期であった)とコンピュータ等の機器を数多く利用したことが今までと異なっている。時期と材料・道具・技法の違い, さらに生徒の違いにより正確には比較分析ができないと思われるが, 次のような点に変化がみられた。

- (1) 描写力に自信の無い生徒が、機器を利用して、作画したり、コラージュ（はり絵）することで、楽しみながら制作に取り組み、完成後に満足感をもてたようである。
- (2) 集中力に欠けるような生徒が、機器を利用することで、興味・関心を持続でき、完成まで自分なりにがんばりながら制作できた。
- (3) 自分で選んだビデオ映像の1場面をプリントした写真やグラフィックソフトで描いた絵などから、それに合わせた色面構成を考えたり、ワープロで打たれた文字などをそれぞれが工夫しながら画面に配置するなど、構成的な能力を養うことができた。
- (4) 男子がこれまでになく積極的に取り組んだ。（機器に興味・関心のある生徒が多いため）

以上の点から、コンピュータ等の機器を使うことは、それぞれの生徒に幅広く、多面的な角度からの意欲付けを図ることになり、自分らしい表現活動へ発展させる能力や態度を高めることのできる有効な指導であると考えられる。また、一部の生徒には、機器の利用の欠点でもある「味気なさ」を気付かせることができ、逆に、手作業中心の人間味のある表現の楽しさを体得させる効果もあった。

今後は、「多様な生徒一人一人の表現能力を高める指導の工夫」という目標に向かい、さらに指導方法を改善し、生徒と共に実践の中で研究を進めて行きたいと思う。



## 人形を作る（S校）

### 1. 題材設定の理由

S校には明るく自由で感受性豊かな生徒が多く、第1学年の授業では真面目に楽しく制作に取り組んでいる。しかし第2学年の課題になると急に悩み込んでしまう生徒が多くなる。その理由は、第1学年の授業では静物画や自画像を描いたり、スターの顔写真を見て三原色を基本にしたポートレートを制作したりするなど、自分の目の前にあるものを描くことが課題であり取り組みやすかったが、第2学年の想像画や人形制作の課題は、他の生徒と同じものを見て制作するのではなく、各自が積極的に資料を集め、自分の表現したいものを思い通りに表現できるように努力することが必要になってくるからである。

手作業が好きな生徒が多く、熱心に取り組む反面、安易な模倣に終わりがちで、ややオリジナリティに欠ける傾向が強いので、今回の人形制作においては、自分の好きな人間（友人やスポーツ選手やスターなど）をもっと身近なものにしたいという欲求を生かして意欲的に取り組みませ、特に技術面から表現の可能性を広げさせ、完成度の高い個性豊かな作品に仕上げさせたいと考えた。

### 2. 指導目標

- (1) 人間の骨格や筋肉やプロポーションを研究し、人体についての理解と人間への愛着を深めさせる。
- (2) 素材になじませ、様々な表現技法を身に付けさせ、表現する楽しさを見つけさせる。
- (3) 自分の満足の行く作品を根気強く取り組んで完成させる力を養い、制作する喜びを味わわせる。

### 3. 多様な生徒に対応した指導の工夫

S校には「少し気に入らないところがあるけど、このくらいでいいや。」とか、「もっとどうにかしたいけど、できない。」とか言う生徒が多く、追求心や技術面でやや劣っている。類型にあてはめると、「無難型」、「不器用型」、「真面目一方型」の3タイプに属している。こうした生徒自身が満足できる作品を完成させるため、それぞれの類型に次のような指導を行った。

- (1) 「無難型」 下絵の段階で、動きのあるポーズを検討させ、資料を集めさせた。また他

の生徒にポーズをとらせて動きを観察して作らせることによって意欲をもたせるようにした。

(2) 「不器用型」 素材に慣れさせるため、粘土でうまく形が作れない場合にはあきらめさせないで再度挑戦させた。手を作ることを苦手とする生徒が多いので、肉付けは手からはじめさせ、何度も作り直しているうちに技法が身に付き、自信につながるようにした。

(3) 「真面目一方型」 画一的で個性の乏しい作品を作ることが多いので、いろいろなポーズの人形を作ることができることを理解させ、積極的に資料を集めさせてアイデアを練らせた。台座の形や質感も工夫させ楽しく制作させるようにした。

#### 4. 指導の過程（授業時間 2 6 時間）

〔主な材料〕

フォルモ粘土（石塑調）1.5 個，割りばし 3 本，針金直径 0.9 mm と 0.5 mm，5.5 m 厚のベニヤ板約 15 cm × 20 cm，澱粉のり，サンドペーパー（180 番）1 枚，二液性プラスチック，アクリル絵具，アルコール系ニス

##### (1) スライド鑑賞（1 時間）

スライドで過去の作例を見せ、それぞれの人形にどんな工夫があるかを学ばせる。また様々なポーズを作ることができることを理解させ、制作の意欲をもたせる。

##### (2) 下絵（2 時間）

各自持参した資料をもとに、身長 28 cm の人形の原寸大の下絵を描かせる。ポーズによって高さが変わるのでよく研究させる。

##### (3) 手と心棒の制作（3 時間）

手のポーズを決め、図に合わせて骨組を作り、肉付けさせる。次に下絵に合わせて割りばしをペンチで切り、針金で固定して心棒を作らせる。

〈手の制作〉 ①



②



③



④



##### (4) 台座（1 時間）

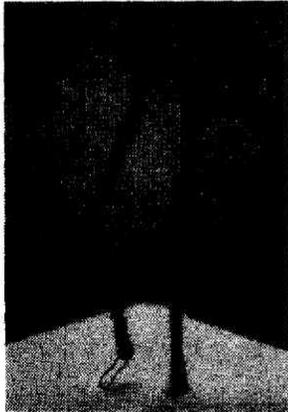
全身の動きと足元の位置を考えながら形を決めさせ、ここでベニヤ板を切って作らせる。

##### (5) 肉付け（1 4 時間）

台座と心棒を釘と針金で固定し、台座から粘土をつけさせる（写真①・②）。靴の形を作り

足元から腰までを肉付けさせる。次に背の上端に、ひじまで肉付けした腕の針金と、小さめに肉付けした頭部の針金を巻きつける(写真③)。これで全体のポーズが決定される。

①



②



③



筋肉のつき方をよく観察させ、裸の肉体を作るつもりで肉付けさせる(写真④)。次に約1mm厚の布状に粘土を薄く伸ばす技法を身につけさせ、服を作らせる(写真⑤)。顔の肉付けもよく研究させ、粘土をつける作業を完了させる(写真⑥)。

④



⑤



⑥



#### (6) 仕上げ(4時間)

なめらかにしたい部分をサンドペーパーで磨かせてから、アクリル絵具で着色させる。絵具が完全に乾いたら、ニスを塗らせて仕上げる。

#### (7) 批評会(1時間)

一人ずつ自分の人形の批評をさせる。他の生徒からの批評も受けさせる。

## 5. まとめと今後の課題

本年度の人形の制作の指導の結果、例年と比較して次のような変化が見られた。

- (1) これまで指は切り分けて作っていたが、今回の技法で非常に手の表情が豊かになった。
- (2) 「無難型」、「真面目一方型」の生徒の中にも意欲的に取り組んだものが増えた。
- (3) 「不器用型」の生徒も自分なりに満足の行く作品を完成させることができたが、最初の手の肉付けに手間取って、時間が足りなくなった生徒も若干いた。
- (4) 今まで優秀な作品を作ってきた生徒の中に、人形制作においては意外に平凡な作品になってしまったものが若干いた。
- (5) 全体的に見ると、例年よりポーズに動きのある作品が増え、手だけでなく顔の表情も良く表現できている作品が多くなった。

以上のような点から、S校の「無難型」、「不器用型」、「真面目一方型」の生徒に、完成度の高い作品を制作させるという目標は、一応達成できたようである。その大きな要因は、自分の手足のサイズの調査にあったと思う。自分が人形の大きさになった時を想定したことによって、人形がただの粘土のかたまりではなく、自分の感情がこもった身近なものになり、特に「無難型」、「真面目一方型」の生徒の制作意欲が高まった。

また、技術的な面では、特に「不器用型」の生徒を「つまずき」から早く立ち直らせるために、プラスチックでの補修が大いに役立ったし、手の制作技法の改良は手だけにとどまらず、全身にまで神経が行き届くようになり、全体のレベルアップにつながった。

今後の課題としては、技術面での改良だけでなく、指導法にも改善する余地がある。生徒の進度、類型に応じたグループごとの指導が必要である。

△  
完  
成  
作  
品  
例  
▽



## CDカバーのデザイン（〇校）

### 1. 題材設定の理由

最近の子どもはひ弱になったとよく言われるが、本校の生徒もその例にもれない。

「思いつかないよー。」と言っては何時間もおしゃべりをして過ごし、「用具を忘れた。」と言って作業をせずにウロウロし、ようやく取りかかったと思うと「失敗したからもうやめた。」と言う。最初は怠けているのだと思ったが、実際には、そうでないことも分かった。

学習の方法が分からない者、承認の喜びを求めている者が多くいることが分かり、何とかしてこの生徒の「できない気の重さ」を「できる気の軽さ」に変えてやりたいと思った。

成就感を味わわせるために、ていねいに作業をすれば、失敗の少ないポスターカラーを使用し、題材は、できるだけ身近で、少しでも生徒が関心をもてそうなものをと考えて、CDカバーを選んだ。

第1学年の最初の課題なので、特に事前学習に十分に時間をかけ、平易で段階的な作業を多く取り入れ、目に見える成果によって自信をもたせながら、次の段階へつなげるように工夫した。

### 2. 指導目標

- (1) 身近なもののデザインに関心をもたせる。
- (2) ポスターカラーの使用に慣れさせ、効率的効果的に彩色させる。
- (3) 楽しく制作をさせ、充実感を味わわせる。
- (4) 完成した作品に自信をもたせる。

### 3. 多様な生徒に対応する指導の工夫

「無気力型」の生徒が多く、何度言っても用具を持参しないので、用具を一括購入し美術室に保管するようにした。また、事前学習では作業の内容を段階的に区切り、その時間になすべきことを具体的に指示した。

「不器用型」の生徒も多いので、トレース・拡大コピー・スパッタリング・マスキング等、不器用さを補う方法を取り入れた。

また、全般に美術に対する興味・関心が薄く、自分で資料を探して来たり、製図用具等を持参する生徒は稀なので、参考作品・参考図書・各種用具を用意し、利用を促した。

#### 4. 指導課程

課 題	時間	学 習 内 容
ガイダンス	2	①用具の配布・記名・名称・使用上の注意・保管方法 ②資料集めについて ③CDカバーの説明

① 新入生召集日に集金をして春休み中に用具を一括購入・仕分けしておく。

個人持ちにしている用具は鉛筆(3B・B・F)、軟質消しゴム、ねりゴム、デザインパレット(小)、水彩パレット、筆(彩色筆2・面相筆1・平筆1)で、A5サイズのクリアケースに入れて乾燥棚に番号を表示して置かせる。

② 制作時に役立つので、新聞・雑誌など見る時、心ひかれる写真・イラストなどがあつたらすぐ切り抜いてとっておくように勧める。

実際にそのようにして集めた資料を、クロッキーブロックに貼り込み、提示する。

③ 上級生の作品を紹介する。

優秀作品はもちろんだが、失敗作も見せ、どこでつまずいたか考えさせる。

色 彩 理 論	2	①明度・彩度・色相・補色・混色 ②色の対比と配色 ③色と感情
---------	---	--------------------------------------

① 明度や彩度という言葉を書き込みながら、ポスターカラーで彩色したチャートを使い、時間をかけて説明するようにしたところ、制作に入ってから個別指導を、生徒が以前より早く、的確に理解するようになった。

② CDカバーでタイトルのように目立たせたい時の配色をどうしたらよいか考えさせた。

彩 色 方 法	1	①ポスターカラーの特長・濃度の調整・混色の注意 ②用具の管理
---------	---	-----------------------------------

① 水の加え過ぎや混色時の物理的混ぜ合わせ不足、用紙を回しながら周囲から塗るなどの注意をする。

② 筆はよく洗い、タオルでふいて形を整え、空気に触れるようにして棚に収納するよう指導

する。

色相環の 彩色	2	12色セットのポスターカラーを使用し、画用紙に印刷された27色の色相環を彩色する。
------------	---	---

セットの9色を混色することにより、無限の色相が作れることを体験させる。

出来上がった色相環はグラデーションで美しく、まずは完成したことを喜んだ。

この作業を取り入れてから、作品にセットの色相をそのまま塗る生徒がかなり減った。

マスキング	2	①好きな言葉の英字を印刷されたローマン体から拾い、字間を調整しながらトレースし、ケント紙に転写する。 ②マスキングフィルムでマスキングして、彩色する。
-------	---	--

② ケント紙を切り落としたり、圧着が不十分で絵の具がしみ込んで、はみ出したりしないように注意する。はみ出さないで塗れることに、生徒は非常に感激する。

筆で塗るよりもカッターで切り抜く方がずっと楽しそうである。

スパッタリング	2	15cm四方の正方形に両端から2色でグラデーションになるように吹き付ける。
---------	---	---------------------------------------

用紙との距離や網につける絵の具の量・濃度、こすり方と吹き付けられる面積や粒子の大きさの関係を覚えさせる。

アイディアスケッチ	2	①思いついたら何でも描いてみる。 ②参考作品や資料に目を通してみる。
-----------	---	---------------------------------------

① 生徒は上手にいかないとすぐ消してしまうので、比較のため蓄積していく方がよいことを指導する。

制作	10	マスキング・スパッタリング・グラデーションなどを必要に応じて応用しながら、効率よく、ていねいに彩色する。
----	----	--

彩色の手順など、個別に相談に乗る。

「日本の伝統色」という色見本が用意してあり、生徒はその中から色を選ぶが、セットのどの色を混ぜたらよいかという質問が非常に多かった。

作業の早さは生徒によって著しい差が出る。9月の文化祭に間に合った作品は展示するが、間に合わなかった作品は、額に入れて廊下に展示した。

なるべく作品のよいところを見つけ、ほめるようにした。

#### 5. まとめと今後の課題

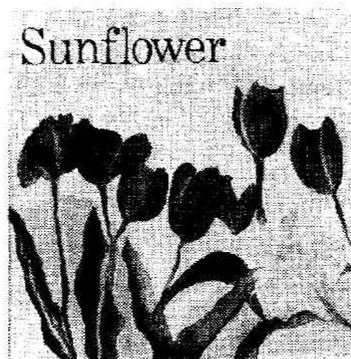
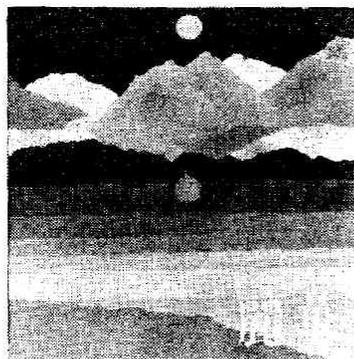
用具を美術室に保管するようになったところ、以前に比べ、積極的に制作に取りかかる生徒が著しく増えた。

事前学習の作業は、生徒に「できそうだ」と自信もてる平易な課題の積み重ねで構成し、成し遂げたという喜びと自信をもたせるようにした。

以前には聞かれることのなかった、「絵の具を塗ったのは何年ぶりかなー。」とか、「こんなに気合い入ったのはじめて」とか、「美術の授業が楽しみ！」という生徒の声を聞くことができた。

本制作では、思うように形がとれなかったり、彩色ができず苦しむ生徒も出たが、マスキングしてタイトルを入れたり、スパッタリングで吹き付けたりすると、思わぬ画面の変化が見られ、喜ぶ生徒が多かった。また、拡大コピーも効果的であった。

意欲的に制作に取り組む生徒の数が増えたが、一斉指導だけではやはり限界があり、質問に来る生徒が多く、個々の対応が間に合わなかった。生徒相互の助け合いや、グループ活動など、指導の工夫がさらに必要であると感じた。



# 視覚障害児も遊べる玩具をつくる（T校）

## 1. 題材設定の理由

物が氾濫し、欲しい物は何でも手に入るように思える現代社会の中で、障害のある人たちや、高齢者のことを配慮して製品をつくることは、まだ見落とされがちだ。それどころか、ハイテク化、技術革新が、かえって不便さを誘発しているケースも少なくない。

しかし、現在そのような状況に新しい動きが起こっている。視覚障害者のための「刻み」をつけたシャンプーのボトルや、テレホンカード。視覚障害児への配慮のある商品にマークをつけて売り出している日本玩具協会。また、デザイナーや、商品企画に携わる人、教育者、福祉関係者らが、商品企画の中にかに視覚障害者への配慮を取り入れていくか、検討していくための組織作りなど、その活動の幅も広がりつつある。

そこで、デザインの授業の中に、このバリア・フリー（障害者、高齢者の障壁を取り除くと言う意）の視点を取り入れる事で、生徒たちが「障害」について考える機会とするだけでなく、本当に必要な物は何か、を判断する力をもつ基礎にできるのではないかと考えた。

また、障害を配慮してデザインすることは、より個々の生徒の創意工夫と柔軟な発想が必要とされる。「最近の生徒は、暗記的な学力はあっても、思考力は、弱くなっている。」という声を聞き、生徒自身からも「もっと一つのことを掘り下げて考える力を養うべきではないのか」という声も聞く。この課題を通して、美術ならではの「自由さ」の中でデザインの問題を掘り下げて考える経験をさせたいと考えた。

玩具をテーマにしたのは、どの生徒でも、使用した経験のある物であり、客観視して分析しやすいと考えたからである。また子供を考える事は、人間の原点を考えることにつながり、人間にとって大切な「触覚的な美しさ」を意識することにもなると考え、本題材を設定した。

## 2. 指導目標

- (1) 視覚障害児へ配慮したデザインを創意・工夫させる。
- (2) 玩具が子供に与える影響を考えさせ、素材や、触覚の美しさを追求し、その大切さを学ばせる。
- (3) 素材に親しみ、原点から物をつくりあげていく喜びを感じさせる。
- (4) 生活の中で、障害者、高齢者などへのデザイン上の配慮は、どのようになされるべきか、

問題意識をもたせる。

### 3. 指導過程

#### (1) 「玩具について考える」レポート(夏季休業課題)

#### (2) 導入

- ① 視覚障害者の擬似体験を行い，発見や感想をまとめる。
- ② 視覚障害者のためにデザインされた製品の工夫を紹介する。
- ③ 「目隠しをしてオセロで遊ぶにはどうすればいいのか」という問題を出し，様々な発見を引き出す。

#### (3) アイデアスケッチ

- ① 「触覚的な不快感を与えないこと」「凹凸で形がわかること」「音がでる工夫があるとよい」など，満たすべきいくつかの条件を与え，材料，表現方法は選択の幅をもたせる。
- ② 材料を数多く提示する。触覚の違う様々な布，いろいろな音の出る笛，板材，塊材，発泡スチロール，ウレタンマット，マジックテープなど。
- ③ 1枚目のアイデアスケッチは，発想の鍵となるので，落書きのようでも気にせず，とにかく描いてみる。
- ④ 2枚目のスケッチは，大きさ，形などよく検討し，それ自体が「計画書」になるようしっかり描く。

#### (4) 制作

- ① アイデアスケッチに沿って制作し，制作中に出てきたアイデアも取り入れさせる。
- ② 制作を通して「視覚障害児も遊べるか」「丈夫さ」「触覚的な美しさ」を検討させる。

#### (5) 鑑賞とまとめ

- ① 目隠しをして遊び，生徒同志で感想を述べあい，まとめる。
- ② 実際に視覚障害児や，地域の子供に遊んでもらう機会をつくる。

### 4. 多様な生徒に対応した指導の工夫

T校においては，美術の授業に対しては，持っているエネルギーの6～7割ぐらい出せば良いと，最初からクールに構えている生徒が少なくない。また，そのような生徒には「そつなくこなす力」が，備わっているようである。本研究の類型としては，「無難型」「義務型」が多い。また，写実表現が苦手なため，美術の授業になるとつい無気力になってしまう「無気力型」まじめに取り組むのだが，結果が思うようにでず達成感の得られない「不器用型」の生徒も3

分の1ほど存在する。このような生徒に意欲をもたせ、達成感をもたせるため、次のような、指導の工夫を試みた。

(1) 「無難型」・「義務型」

アイデアスケッチの段階で、発想や工夫と計画性を重視し、簡単に合格を与えず、何度か再提出させ、深く検討させる。様々な材料や、表現方法から、自分に合ったものを選択することで、積極的に取り組む意欲を引きだす。また、実際に盲学校等で使ってもらうことを目標に制作することで、意識を高める。

(2) 「不器用型」

アイデアの段階から、特に、機能性や丈夫さ、仕上げの美しさを意識させる。制作方法は計画の段階でしっかり把握させる。

(3) 「無気力型」

「無気力型」の生徒も、材料や表現方法を選択できることが、意欲的に取り組む糸口となる。しかし、中にはアイデアスケッチを描く時点ですぐに諦める生徒もいるので、そういった生徒には、何を作るかより、どのような材料で作るかを考えさせ、まずは材料を揃えさせる。材料を手にし、実際に制作を始めながら、出てきたアイデアを取り入れさせるようにする。また、機能性、仕上げの確かさ、美しさで才能を発揮できるようにも導く。

## 5. まとめと今後の課題

最初にこの課題を予告した時の生徒の反応は、「難しい!」「無理だ!」といったものだった。しかし、「バリア・フリー」という言葉は新鮮で、生徒たちは導入時に、自分たちの生活を違う角度から見ることを始め、今まであまり作らなかったものを創造することに知的好奇心をかきたてられたようだ。アイデアを考えるにあたっては、素材から考える生徒、加工方法から考える生徒、目的(玩具のジャンル)から考える生徒とちょうど3つに分かれた。

(1) 「無難型」・「義務型」

発想の段階で、多くの生徒が苦しんだ。「絵を描いている方がずっと楽」とほやく者もいたが、安易な発想では満足せず、一人一人個性的なアイデアを考え出してきた。また、途中で出て来た発想は積極的にとり入れ、問題が生じては解決していきながら、ねばり強く制作に取りくむ姿勢が生まれた。自分の好きな材料、表現方法を選べるため、楽しみながら制作を続けることができた。

(2) 「不器用型」

発想自体は平凡であったり、既存の玩具や、参考資料のアイデアを取り入れたたりした生

徒が多かったが、作品としての完成度は高まった。他の生徒を驚かす程、完成度の高い作品もあった。

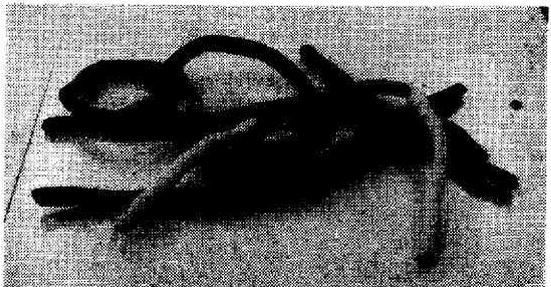
### (3) 「無気力型」

「自分の得意分野で勝負！」と積極的に取り組んだ生徒がでてきた。紙の上で想像するアイデアスケッチでは、どうしても行きづまってしまったが、具体的に材料を揃えて制作をすすめると、興味が持続し、途中で新しいアイデアを生み出す生徒もいた。

視覚以外の五感で物を作ることは、「没入型」の生徒にとっても、新しい体験で、新しい表現方法や、素材の持つ可能性の発見につながった。盲学校等で実際に使ってもらうことが励みになり、他の障害のある子供たちへの配慮を、デザインの中にとり入れた生徒も、何人かいた。今後の課題としては、次のようなことが考えられた。

- (1) 材料や、制作方法をもう少し制限した方が、技術的な完成度が高くなったのではないのかと考えられる面もあった。
- (2) 個別指導の大変さは、やはりあり、1クラス28名の展開のクラスの方が、44名のクラスより、行き届いた指導ができた。
- (3) 手芸的な楽しみのみで終わることがないように指導する必要がある。

障害を考えることからスタートした課題であったが、生徒自身の成長過程や夢を作品に託した、自己表現の場になったように思えた。



## 生徒が自ら課題を選び、主体的に制作する授業（H校）

### 1. 題材設定の理由

生徒はそれぞれ特性をもつため、生徒の数だけ多様性があるなら、その多様な生徒に共通な課題を与えるという枠にはめるのではなく、むしろ与える課題に多様性をもたせる方がよいのではないか。生徒が、自分の本当に制作したい物を模索し、各自が、制作計画を立て、素材を準備し、制作する。このことは、共通課題のもつ画一的で、ややもするとおしつけになりかねない指導と異なり、その導入の時点で、個々の生徒が興味、関心に基づいて、それぞれ表現のスタイルを選び、課題を開発できるというメリットがある。

しかし、生徒が、自分の興味、関心を満足させることにとどまるあまり、いろいろな表現方法の中から、最も適した手段を模索していこうとする意欲や、制作に対する全般的な創意工夫がおろそかになりがち傾向も見受けられる。今回は、このマイナス点に着目し、二期制という特徴を生かしつつ、生徒の主体的な表現意欲を伸ばすための、指導の工夫を試みた。

### 2. 指導目標

- (1) 自由に課題を選択させることによって、表現意欲を高めさせる。
- (2) 一つの分野で長期にわたって制作させることによって、表現に創意工夫をもたせる。
- (3) 制作に熱中し、楽しむことによって、自己解放、自己実現を図る。
- (4) 自分以外の様々な表現、作品に触れさせることによって、他者理解を図り、広く芸術作品全般に対する関心を高める。

### 3. 多様な生徒に対応した指導の工夫

生徒が、最初から、自分の制作したいものをイメージして授業に臨むことが望ましいが、現実にはそうならないことが多い。そこで、導入に際して次のような工夫をした。

- (1) 最初に過去の参考作品をスライドで鑑賞させ、ガイダンスを行なう。
- (2) 簡単な個人面談を行い、対話の中から制作へのイメージを探らせる。  
(面談期間中は共通課題 1年—静物デッサン、2年—風景画着彩)

これらの準備期間を設けることによって、生徒一人一人が制作したいものをイメージできるようにした。

このカリキュラムでは、自由に課題を設定できるため、すべての生徒が最初から授業に対して意欲的に取り組みそうに思える。ところが、実際には、いつまでたっても自主的な制作にとりかかれないうる「義務型」や、一見、熱中して制作しているかにみえても、ただ単にノルマをこなしているだけの「無難型」の生徒も少なくない。さらに、自分の制作のスタイルを確立している生徒も、それがあまりにパターン化した模倣の域を出ない「真面目一方型」だったりもする。これらの生徒を生きいきとした自己表現が意欲的にできるようにさせるにはどうすればよいかと考えた時、やはり導入の是非が問題となってくるようである。さらに生徒一人一人に制作の構想を具体化させるために、導入の指導の後に次のような指導を行なった。

### (3) 制作計画を作成させる

導入によって、定まってきた制作の方向性を、より具体的に年間計画表として作成させ、各自、揃えなければならない素材や用具、及び、制作のプロセスを把握させた。

### (4) 分野に応じて様々な技法や発想を指導する

(2)の面談のなかでも、適宜行なってきたが、実際の制作に入ってから、発想のうかばない生徒や、技術面で行きづまってしまう生徒がでてくる。それらの生徒には、当人にとって新しい技法や、発想を提示し、指導することによって、イメージの転換や、拡大を図らせた。

### (5) 講評会

完成した作品を、一人ずつ発表、さらに自分で批評させることによって、自分の作品を第三者的視点から眺めさせ、次回作へのステップとさせた。また、この時間は、友だちの様々な表現技法やアイデアに、直接触れ、それぞれのもつよさを味わわせた。



制作風景

4. 指導課程

	学 習 活 動	指 導 の 工 夫
導 入	(1) 参考作品の鑑賞とガイダンス (過去の生徒作品) (2) 個別面談 (3) 制作計画表作成	得手不得手，好き嫌いの強い生徒に対して 全員が意欲的にとりくめる課題を見い出せる よう，できるだけ多くのジャンルの作品，表 現手段に触れさせる。
展 開		各分野ごとに，素材や基礎的技法の説明， 実技練習から入る。 平行して，アイデア・スケッチや各種下絵 などをつくらせ，構想を明確にさせる。 場合によって発想を練り直させたり，新た な技法を紹介し，指導することによって，表 現に工夫をもたせる。 最後までつくりあげることの大切さを理解 させる。
ま と め	(1) 発表—講評 (2) 鑑賞	自己の作品を第三者的立場から眺め，制作 全体をふりかえらせる。 うまくいった点と，失敗した点を分析させ る。 様々な作品を鑑賞させることによって，表 現のバリエーションを学ばせる。 友だちのもの見方，制作方法，制作態度 等を知ることによって，他者理解を深めさせ る。

## 5. 反省と今後の課題

当初の目標が、どれ程達成されたかをふりかえると、まず、自由に課題を選択できるということが、このカリキュラムの特徴であるため、前・後期それぞれの制作が実り豊かなものになるかどうかは、最初の選択にかかっているわけである。本当に作りたいものを選ぶというのは、やさしいようで、なかなか難しい。そのためには、ある程度深く、自分を見つめてみなければならぬ。その一助とするために、過去の作品のスライドを上映したが、これには一長一短あるようであった。自分の感じかたに合った、制作へのきっかけになるような作例に出会えた生徒はよいが、悪くすると、参考提示がそのまま範囲の限定、「この中から選べ」という強制になりかねない。事実、参考作品で示された分野から選ぶ生徒がほとんどである。個別面談はもちろん、事前の説明が重要だと改めて思った。

次に、今回の指導の工夫でポイントとした安易で画一的な表現に陥りがちな生徒の制作に、どうすれば創意工夫をもたせることができるかということを解決するために、それぞれの分野でより専門的な技法や発想法を提示し、指導をした。生徒によっては「面白そう」と興味を示し、積極的に取り組むなど、それなりの成果はあった。しかし、あくまでも生徒の主体的選択による制作という前提があるため、教える側からのアプローチも限定されてくる。生徒の中には、自分なりに工夫していろいろと面白いことをする者もいるし、模写ばかりしている者も多いが、本人が意欲的に取り組めば、それなりの成果は期待できるものと考えられる。

各自、自らの責任において制作しているので、皆、「自分の作品」という意識を持っている。それが、結果として、他の友だちの作品を重視する意識につながったことは、講評会における他の作品への関心の高さからうかがえると思う。



完成作品例

## V 考察と今後の課題

すべての生徒に、意欲的に楽しみながら表現活動に取り組ませたい、そんな願いから、研究主題「多様な生徒の表現能力を高める指導の工夫」を設定し、それぞれの学校の状況も踏まえながら研究を進めてきた。急速な社会の変化は、様々な形で多様な生徒へと変化させている。しかし、高等学校では、ほぼ同傾向の生徒が集まるため、画一的・均一的な指導でも学習の効果が上がるという状況も見られるが、生徒の個性の伸長を目指した美術科の指導に当たっては、生徒一人一人の実態に対応し、自分らしい表現を確認させ、高めさせる指導の工夫が必要である。本研究では、美術の学習における多様な生徒の実態とそれに対応した、重点的に高めたい表現能力を明確にすることを試みた。また、美術の実践の中でそれぞれの表現能力を高める指導の工夫をし、授業の実践を基に次のように考察した。

1. 「没入型」の生徒には、他者の様々な表現や作品に接する機会とそのよさを理解しようとする態度を大切にして制作に取り組ませると、自分らしい表現を追求しようとする意欲が見られた。
2. 「無難型、義務型」の生徒には、教師が粘り強く生徒に接したり、従来の美術の学習にとられない視点から題材を与えたりすると、意欲的な態度が見られた。また、写実的な表現力に少しでも自信をもたせるような指導の工夫が有効であった。
3. 「不器用型、真面目一方型」の生徒には、表現した内容に対する適切な評価と次なる動機付けが必要であった。また、題材や材料・用具・技法等の活用によって、今までと違った表現方法を経験させると、柔軟に制作に取り組もうとする姿勢が見られた。
4. 「集中力不足型、無気力型」の生徒には、身近な題材や興味・関心の対象を制作に生かせる題材など、題材の工夫が必要であった。また、グラデーションやスパッタリング等表現効果が現れやすい技法を制作に活用させると満足感が得られ、楽しみながら制作を持続することができたようである。さらに、材料・用具をいつでも使えるように整理させることにより作業に取り組もうとする態度を育てることができた。

以上、類型別に高めたい表現能力を明確にし、多様な生徒に対応した指導の工夫をすることによって、ねらいを満足させる効果が見られた。今後このような指導の工夫を、年間計画の中でどこに位置付けるか、類型化だけでは解決できない生徒への対応をどうするかなどについて、さらに幅広く考えていかなければならない。